

共同運営部門：がん治療センター

一概要一

がん治療センターの活動の一貫として、「がん治療検討委員会」を開催している。本委員会は、がん治療全般における円滑な治療の遂行及び薬物治療に関して適正な管理を行うことを目的としている。

「がん治療センター」は日本癌治療学会、日本臨床腫瘍学会、日本外科学会、日本消化器外科学会、日本乳癌学会をはじめ、各領域の悪性疾患治療に関する学会の指導医、専門医、認定医を配している。化学療法、分子標的治療等薬物治療に関する臨床試験に多数参加し、胸腔鏡、腹腔鏡などの低侵襲手術も積極的に行っている。その他、低侵襲治療として原発性および転移性肝がんに対するラジオ波焼灼療法だけでなく、早期乳がんに対してもラジオ波焼灼療法を研究的治療として前方視的臨床試験等に登録し行なっている。

また、各種がんの診断治療においては、治験や全国規模の臨床試験に深く関与しており、エビデンス構築に貢献している。これらの実績を基盤とし、従来行われている進行癌に対する集学的治療に加え、早期癌に対する新たな薬物治療、手術治療等に関しても、先進的な診断・治療を積極的に取り入れ、医療の質の向上に貢献している。また診断、治療方針を決定し難い症例を中心にカンサーボードにて多数の診療科専門医をはじめ、多職種による検討を積極的に行っている。血液がんに関しては、骨髄移植が再開され適応症例に対応している。

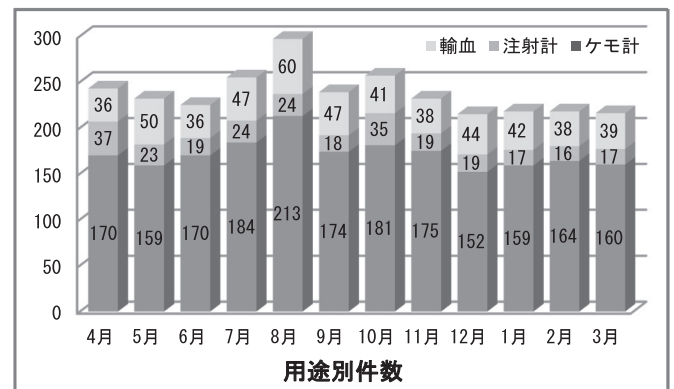
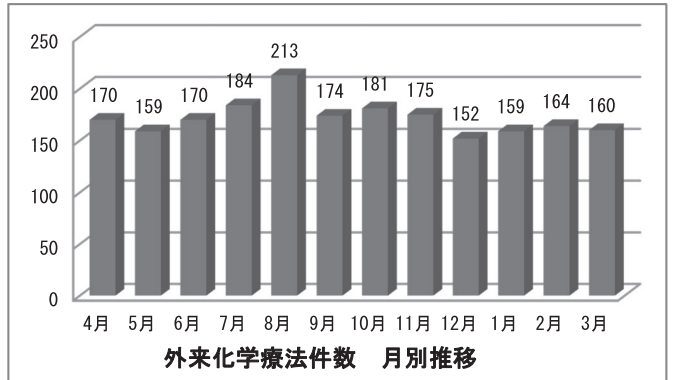
緩和ケアチームでは週一回の病棟回診を行っており、がん性疼痛コントロールや精神的不安等の軽減のため多職種による検討を行い、方針を決定している。

一実績一

薬剤部からの報告

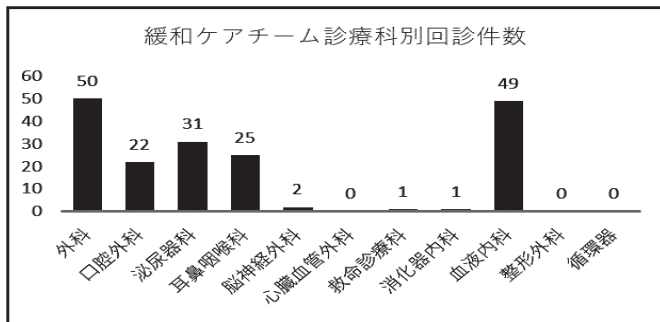
科学療法処方箋枚数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
外来	147	148	168	167	192	163	147	143	129	140	140	140	1,824
入院	82	92	131	128	101	90	112	132	103	105	141	122	1,339
総数	229	241	299	295	293	253	259	275	232	245	281	262	3,164
ミキシング本数	312	337	467	428	435	358	382	385	303	326	384	366	4,483

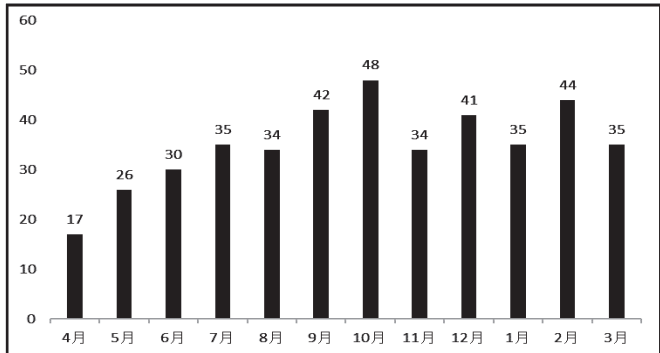


外来化学療法件数(2016年度)

月	外(乳)	外(大腸)	外(胃)	外(膵)	外(他)	外科計	腫	肺内	血内	泌	耳	脳外	口外	中止	ケモ計	リポソ	ゾラ	フェソ ロデッ クス	ソメタ	ラン マーク	レミケ オ	アクテ ムラ	オレン シア	その他	注射剤	加算計	剤	情報	ポ ート フラ ッシュ	ポ ート 抜去	点 流	静 筋 下 注	輸 血	合 計
4月	49	23	9	0	0	81	3	0	41	2	3	2	19	19	170	8	6	3	4	10	1	1	3	1	37	207	6	13	7	0	1	2	36	272
5月	43	22	7	0	0	72	2	0	53	1	1	3	15	12	159	2	5	3	3	8	1	1	0	0	23	182	14	15	5	0	1	0	50	267
6月	40	34	10	0	0	84	3	0	56	0	2	2	9	14	170	2	0	2	6	7	0	0	2	0	19	189	15	21	5	0	2	0	36	268
7月	39	25	10	2	0	76	2	0	71	2	5	2	10	16	184	3	4	1	3	6	2	3	1	1	24	208	16	29	4	0	0	0	47	304
8月	48	25	10	8	1	92	2	0	82	1	4	2	8	22	213	4	5	1	4	6	0	2	1	1	24	237	13	21	4	0	1	0	60	336
9月	32	26	10	2	0	70	1	0	70	1	10	1	3	18	174	4	1	1	4	7	0	4	0	0	18	192	15	15	5	0	2	0	47	276
10月	47	15	7	4	0	73	4	0	55	2	3	4	12	28	181	14	2	1	3	10	1	1	2	1	35	216	7	9	6	0	0	0	41	279
11月	40	31	9	4	0	84	0	0	51	1	4	2	6	27	175	3	3	1	5	6	0	1	0	0	19	194	11	28	5	0	1	0	38	277
12月	45	24	9	8	1	87	2	0	38	1	3	1	0	20	152	5	0	1	1	8	1	2	1	0	19	171	10	14	5	0	0	0	44	244
1月	38	35	8	3	0	84	3	0	50	1	1	2	1	17	159	5	1	0	2	8	0	1	0	0	17	176	7	17	5	1	0	0	42	248
2月	46	24	21	4	0	95	2	0	34	1	0	2	5	25	164	3	1	0	1	7	1	2	1	0	16	180	12	13	4	0	0	0	38	247
3月	29	38	11	7	0	85	1	0	34	0	3	1	4	32	160	4	0	0	2	8	1	0	0	2	17	177	21	21	3	1	0	0	39	262
月平均						81.9									172										22	194								273
合計	496	322	121	42	2	1,065	2	0	635	13	39	24	92	250	2,061	57	28	14	38	91	8	18	11	6	268	2,329	147	216	58	2	8	2	518	3,280



緩和ケアチームからの報告



緩和ケアのべ人数

臨床研究状況（一部抜粋）

研究内容	予定 被験者数
肝胆膵外科手術後の表層および深部感染後の切開創治療における陰圧閉鎖療法(Negative Pressure Wound Therapy:NPWT)の有用性に関する前向き検討	5
大腸がん患者の血液中アミノ酸濃度およびアミノ酸関連代謝物濃度に関する臨床研究	20
エストロゲン受容体陽性HER2陰性乳癌に対するS-1術後療法ランダム化比較第Ⅲ相試験(POTENT)	8
エストロゲンレセプター陽性再発乳癌を対象としたエベロリムス使用症例における口内炎予防のための歯科介入無作為化第Ⅲ相試験	3
転移性乳がん患者におけるアブラキサン(3週毎投与方法)の至適用量を検討するランダム化第Ⅱ相試験	3
乳癌の術前・術後化学療法における発熱性好中球減少症に関する観察研究	5
HER2陽性進行・再発乳癌におけるエリブリン+ベルツズマブ+トラツズマブ3剤併用療法の有用性の検討臨床第2相試験	2
肝胆膵領域悪性腫瘍に対する術後静脈血栓塞栓症予防に対するエノキサパリン投与の第Ⅱ相ランダム化比較試験	6
広範な乳管内進展を伴わない0-I期乳がんに対するラジオ波焼灼治療の安全性に関する第Ⅱ相臨床試験	6
HER2陽性の進行・再発乳癌に対するベルツズマブ再投与の有用性を検証する第Ⅲ相臨床試験～ベルツズマブ再投与試験～	3
胃切除患者に対する積極的な栄養介入効果に関するランダム化比較試験	30
胃癌患者におけるNY-ESO-1抗体価の腫瘍マーカーとしての有用性の検討	30
大腸癌術後補助化学療法におけるTS-1の投与方法に関するrandomized Phase II trial	5
症例登録システムを用いた腹腔鏡下肝切除術の安全性に関する検討	3
標準化学療法施行後に病勢進行が認められた転移性結腸・直腸癌患者を対象とした、Regorafenib120mg/day療法に関する有効性及び安全性の検討	2
内分泌療法耐性エストロゲン受容体陽性転移乳がんに対する二次内分泌療法のコホート研究	3
高リスク成人骨髄異形成症候群を対象としたアザシチジン投与方法に関する臨床第Ⅲ相試験－検体集積事業に基づく遺伝子解析研究を含む－JALSG MDS212 Studyおよび厚生労働科学研究費補助金による検体集積事業との合同研究	8
髄液を用いたB細胞性非ホジキンリンパ腫の中樞神経再発予測因子の検討	

委員構成

医師 (14名)	診療局次長兼がん治療センター長兼外科主任部長	位藤 俊一
	診療局長兼血液内科部長	鳥野 隆博
	肺腫瘍内科部長	森山 あづさ
	Acute care surgery 副センター長兼外科部長	山村 憲幸
	耳鼻咽喉科部長	裕田 猛真
	口腔外科部長	大前 政利
	病理診断科部長兼検査科部長	今北 正美
	周産期センター産科医療センター長兼外科部長	荻田 和秀
	中央放射線部長兼部長兼放射線治療センター長	櫻井 康介
	呼吸器センター長兼呼吸器外科部長	桂 浩
	膠原病内科部長兼リウマチセンター長	入交 重雄
	泌尿器科医長	藤井 令央奈
	脳神経外科副医長	井間 博之
	血液内科科長兼輸血部長兼医療安全管理室副室長	福島 健太郎
看護師 (4名)	外来副看護師長兼急性期ケア推進室	森 沙苗
	外来看護師兼急性期ケア推進室	杉野 幸恵
	8階海側看護師長	射手矢 奈津子
薬剤師 (2名)	8階海側看護師長	高畠 麻由美
	薬剤部部長	森朝 紀文
MSW (1名)	薬剤科主査	中川 直樹
	MSW	下村 恭子
事務 (4名)	医療マネジメント課長	林 一彦
	医療マネジメント課主幹	守谷 美輝
	医療マネジメント課診療情報管理係	坂田 祐美子
	医療マネジメント課診療情報管理係	角家 心子

—今年度の成果と反省点—

カンサーボード検討症例は多職種が参加し適切に検討されているが、カンサーボード開催頻度を増加させ、より多数の症例に対応することが今後の課題である。

—来年度への抱負—

地域連携をより強固にしつつさらに安全、確実な診断、治療やエビデンス構築に貢献する。